

ルツ記の研究 — 1章 18～22節 —

柘 曉 生

はじめに

前稿において我々はルツ記1章8-17節の考察を試みた¹。ルツ記1章の三部構成の真中の部分(B)である8-17節は、ナオミの会話が3回あってそれが全体の枠組を構築しており、その真中の第2回目の会話は三部分に分割され、さらにその真中にあたる第2区分は三区区分され、この三区区分の真中の第2区分(12節後半)が中心であると見た。

本稿ではこれにつづくルツ記1章の三部構成の最後の部分(A')である18-22節の考察を試みる²。この箇所は(a)18-19節、(b)20-21節、(a')22節の三区区分から成り立ち³、真中(b)のナオミの会話を中心として前後に叙述文を置いた構造となっている。

1章は士師たちがおさめていた時代に飢饉がおこり、エリメレクとその一家がベト・レヘムからモアブの平野に出かけて行くという書き出しで始まる。物語が大きく転回するのは、モアブの平野でエリメレクが亡くなり、二人の息子もモアブの女性を娶りながらも死んでしまうという

¹ 「ルツ記の研究 — 1章 8～17節 —」『藤女子大学キリスト教文化研究所紀要第12号』(2011) 25-55頁。

² R. L. Hubbard は19-21節を、H. W. Herzberg, K. Nielsen, ALacocque は19-22節を、J. M. Sasson, E. Zenger, C. Frevel, F. Bush, I. Fischer は19b-22節を一つの単位と見る。拙稿「ルツ記の研究 — 1章 1～7節 —」『アカデミア』文学・語学編第89号(南山大学, 2011年) 57頁参照。筆者が18-22節を一つの単位とするのは本稿で詳述するように文学構造上の観点からである。

³ これは「おわりに」で見ると、(A) 1-7節との対応関係からは、(A) 18-22節の(c') 18-19節、(b') 20-21節、(a') 22節と理解される。

ことにある。ちょうどその時、主が食物(レヘム)を与えられたと聞いて、ナオミと嫁の一人ルツがモアブの平野から再びベト・レヘムに帰って来る。それはちょうど大麦の刈り入れの初めの頃であったというのである。

地理的にはベト・レヘムから出発してモアブの平野に寄留し、再びベト・レヘムへ帰還するという回帰であり、時間的には士師たちがおさめていた時代という長い時間の区切りで始まり、大麦の収穫の初めというより短い時間の区切りに絞られて終わっている。飢饉で始まる1章は収穫で終わり、この主題は2章へとつながってゆくのである。

1章 18-22節の全体的構造

集中化構造

- ┌ a 18-19 ナオミとルツの帰還
- ├ b 20-21 ナオミの会話
- └ a' 22 ナオミとルツの帰還

18-22節はナオミの会話(20-21節)を真中にして、前後の叙述文が枠構造を形成している。後述するようにナオミの会話は集中化構造となっており、その真中の「行く」と「帰る」が枠組である前後の文節の「行く」と「帰る」と連繋している。枠組にはそれぞれ、「着く」、「ベト・レヘム」、「ナオミ」がインクルジオとして出てくる。

- ┌ a 行く(הלך, 2回)
 - ┌ 着く(בוא, 2回) ベト・レヘム(2回) ナオミ
 - └ 私を(י, 3回) ナオミ
- ├ b
 - ┌ 行く(הלך, 1回)
 - └ 帰る(שוב, 1回)
- └ a' 帰る(שוב, 2回)
 - ┌ 私を(בי/לי, 3回) ナオミ
 - └ 着く(בוא, 1回) ベト・レヘム(1回) ナオミ
 - モアブの平野(1回) ルツ

キアスムス

町の女たちとナオミとの対話(19byと20-21節)を一对のものとして把握すれば、これがナオミとルツの帰還の記事(19aと22節)には

さまれたキアスムスの構成となっているとも考えられる⁴。しかしながら、18-22節では対話というよりもナオミの会話のほうに重点が置かれているのでこの解釈は参考としておくにとどめる。

- (a) 19a ナオミとルツの帰還 (b) 19b γ 女たちの会話
 (b') 20-21 ナオミの会話 (a') 22 ナオミとルツの帰還

1. ナオミとルツの帰還

(1) 1 : 18-19 の本文

- 18a (6 語) וְתָרָא כִּי־מִתְאַמְצָת הִיא לִלְכַת אַחָה
 18b (3 語) וְתִחְדַּל לְדַבֵּר אֵלַיָּהּ
 19a (6 語) וְתִלְכְּנָה שְׁתֵּיהֶם עִדְ־בְאֵנָה בֵּית לַחַם
 19b α (4 語) וַיְהִי כִבְאֵנָה בֵּית לַחַם
 19b β (4 語) וְתָהֶם כָּל־הָעִיר עֲלֵיהֶן
 19b γ (3 語) וְתֹאמְרֵנָה הַזֹּאת נַעֲמִי

(2) 1 : 18-19 の翻訳

- 18a ナオミはルツが自分と一緒にいくと強く心に決めているのを見て⁵、
 18b 彼女に言うのはやめ、
 19a ベト・レヘムに着くまで二人一緒に⁶歩いて行った。
 19b α 彼女たちがベト・レヘムに着いたとき、
 19b β 町中が彼女たちのことで大騒ぎになり、
 19b γ 「これはナオミではないの」と女たち⁷は言った。

⁴ F. Bush は女たちとナオミの対話を中心に 19b-c (introduction) と 22 節 (conclusion) を枠組として理解する。 *Ruth/Esther* (Nashville 1996), 89-90, 94 頁参照。しかしながら後述するようにナオミの会話の構造分析の一部は適切ではない。

⁵ 「ナオミ」も「ルツ」も原文では「彼女」。

⁶ 本来は「彼女ら二人」と女性形であるべきなのが、原文では「彼ら二人」と男性形になっている。4 : 11 も同様である。代名詞が女性形ではなく男性形で用いられている例は、1 : 8, 9, 22 などにある。

⁷ 原文では「彼女たち」。

(3) 1 : 18-19 の構造

- a [18a : 見る (3sg.f.) + ki + 決める + 彼女 + ~ に (1°) ・ 行く + 共に ・ 彼女
 18b : 断つ (3sg.f.) + ~ に (1°) ・ 語る + ~ に ・ 彼女
 b [19a : 行く (3pl.f.) + 彼ら二人 + ~ まで ('ad) + 着く + ベト ・ レヘム
 19b_a : 在る (3sg.m.) + k° ・ 着く + ベト ・ レヘム
 a' [19b_β : 騒ぐ (3pl.f.) + 全ての + 町 + ~ に (1) ・ 彼女ら
 19b_γ : 言う (3pl.f.) + これは + ナオミ

集中化構造

- [a ナオミの見解と沈黙 彼女 (היא) : 人称代名詞 = ルツ
 b ベト・レヘムへの帰郷
 a' 女たちの歓迎と会話 これ (זאת) : 指示代名詞 = ナオミ

① 枠組 a-a'

a (18節) ではナオミとルツの二人の女性たち, a' (19節後半) では町中の女たちとナオミという女性たちで枠組みが構成されている。但し, a ではナオミが主語であり, a' では町の女たちが主語となっている⁸。

(→) a においてナオミがルツに「語るのをやめる」のに対し, a' においては町の女たちが騒ぎ立ってナオミに「言う」と述べられている。冷静に語るのをやめるナオミと興奮して言う町の女たちが対照的である。

- [a (18b) ナオミ (3sg.f.) → ルツ : 語るのをやめる (חרל לרבר) (חרל לרבר)
 a' (19b_γ) 町の女たち (3pl.f.) → ナオミ : 言う (אמר)

(二) a では「彼女」(היא) という3人称女性人称代名詞がルツに適用されているのに対し, a' では「これ」(זאת) という3人称女性指示代名詞がナオミに適用されている。二人の異なる女性に対して, 異なる代名詞

⁸ a (18節) で3人称女性単数の動詞「見る」, 「やめる」の主語はナオミであり, 対象はルツである。他方, a' (19節後半) で3人称女性複数の動詞「騒ぎ立つ」, 「言う」の主語は「町中」であるが, 動詞が3人称女性複数であることから, これは町中の「女たち」であることが言外に意味されると理解される。P. Joüon, *Ruth* (Rome 1953) 43. 同, GHB, §155bN. 参照。4 : 14 では「女たちはナオミに言った」と主語が明白に「女たち」と書き記されている。

の用法という対応関係がある。

(三) a においてはナオミと一緒に行くというルツの心持が「強固である」と言われているのに対し、a' においては町の女たちがナオミとルツに「騒ぎ立ち」と述べられており、両者の感情が明白に表現されている。

a 18a ルツの気持は「強固である」(אָמִץ)⁹

a' 19bβ 女たちの心は「騒ぎ立つ」(הוֹם)¹⁰

(四) ただ、a の2分節それぞれの後半が並行的であるのに対し、a' の2分節は並行的ではなく、その点で文体のバランスは取れてはいない。a とともに2分節それぞれの後半が並行的であるのはb(19a-19bα)である。

(a) ナオミ

18a はナオミと一緒に行くというルツの強い決断をナオミが見て取ることを6語で記し、18b はそれゆえにナオミが彼女に語りかけるのをやめるということを短く3語で述べている。18節の2分節(a, b)それぞれの後半は並行的に記述されている。

[18a …+～に (1^o)・行く (inf.) +～共に (et)・彼女 (ナオミ) לְלַכְתָּ אִתָּהּ
18b +～に (1^o)・語る (inf.) +～に (el)・彼女 (ルツ) לְדַבֵּר אֵלַיהָ

(→) 18節の2分節それぞれの前半はナオミが主語の動詞ではじまっており、並行的であるのはそれぞれの後半においてだけである。どちらも、前置詞「～に」(1^o)・不定詞+前置詞・3人称女性単数代名詞という同じ順序で、はじめの前置詞「～に」(1^o)とおわりの3人称女性単数代名詞「彼女」(ha) は2分節とも同じ単語である。ただ同じ「彼女」であ

⁹ ヒトパエル形分詞。過去における持続的な気持ちをあらわす。P. Jotjon, *Ruth*, 43, *GHB*, §121f. F. Bush, 前掲書, 83 頁参照。J. Schreiner は人物の特性をあらわす動詞と見る。“אָמִץ” *TDOT*, I:323-327. 他にヒトパエル形は王上 12:18 = 代下 10:18, 13:7 に出てくる。

¹⁰ הוֹם に関しては、הוֹם/הוֹם のニツファル形と解釈して「騒ぎ立つ」と訳す。*BDB*, 223. *HALAT*, I:232. H. F. van Rooy, *NIDOTE*, I:1018. *DCH*, II:504. 参照。ニツファル形は全部で3回あり、「(大声で叫んだので) 地がどよめいた」(サム上 4:5) や「町は騒いでいる」(王上 1:45) などと照らし合わせればルツ 1:19b の הוֹם を「騒ぎ立つ」と訳すことが可能であると思われる。サム上 18:6-7 には、ダビデが帰ってきた時、町中の女たちが出てきて、歌い踊って熱狂的に出迎えたとの記事がある。

りながら、18a はナオミを意味し、18b はルツを意味しているという違いがある。

(二) 18a も 18b も同じ前置詞「～に」(ל) に付けられている動詞は両者ともに不定詞であり、18a の不定詞は「行く」、18b の不定詞は「語る」である。

(三) 18a と 18b の最後尾にある人称代名詞「彼女」に付けられているのは両者ともに前置詞である。ただ 18a は「ともに」(et) というナオミとルツの共存をあらわす前置詞であるのに対し、18b は「～に」(el) というナオミからルツへの方向をあらわす前置詞であるという違いがある。

(a) 女たち

a'(19bβ-19bγ)は町の女たちが主語である2分節から成り立っている。ただ前分節の 19bβでは彼女たちが騒ぎたてる相手がナオミとルツの「彼女らに」(עליהן)であったのに対し、後分節の 19bγでは「これは (הזאת) ナオミではないの」と述べられ¹¹、ナオミ一人だけが問題となっており、ルツは等閑に付されている。

町中の女たちがナオミとルツの二人に大騒ぎしながらも、彼女らはルツをはじめ見るのであり、馴染みなのはナオミであるから、最後にはナオミ一人へと焦点が絞られていると考えられる。

また真中の b (19a-19ba) ではベト・レヘムが2回繰り返されているのに対し、a' (19bβ) ではそれが町という単語に置き換えられている。ベト・レヘムから出発し、モアブの平野に寄留し、再度ベト・レヘムに戻るのであるが、そこは町であるというのである。いわば家(ベト・レヘム)から出かけ、野(モアブの平野)を経て家(ベト・レヘム)へと帰るが、そこは町だというのである。

町中の女たちがナオミとルツの「彼女らに(関して)」(עליהן)騒ぎ立っ

¹¹ ここでの副詞「～ではないか」(ה/ha)は疑問というよりも、反語的な用法で、歓喜の驚嘆をあらわす。“*C'est donc Noémi !*” P. Jotjon, *GHB*, §161b. “an exclamation of joyous surprise” R. L. Hubbard, 前掲書, 123. “a rhetorical question” F. Bush, 前掲書, 91.

て、「これはナオミではないの」と言う (אמר, 3pl.f.) のに対し, ナオミはその言葉を引き受けて 20 節で「彼女らに(対して)」(עליהן) 言う (אמר, 3sg.f.)¹²。ナオミはルツに対しては語る (דבר) のをやめるのであるが, 町の女たちに対しては言い返す (אמר) のである。「彼女ら」(עליהן) に対する動詞は「言う」ではなく「騒ぎ立つ」ではあるが, 語順を合わせみれば, (a)彼女らに(עליהן)-(b)言う(אמר) × (b')言う(אמר)-(a')彼女らに(עליהן) とキアスムスの様式で形成されているということがわかる。

②真中 b

真中の b もまた a と同様に, 2 分節それぞれの後半が並行的に書かれていて, ベト・レヘムへ帰り着くまで行くことと, ベト・レヘムその地へ着いたという時間と空間が問題となっている。

19a ~まで ('ad) + 着く + ベト・レヘム ער־באנה בית לחם

19ba + k^e・着く + ベト・レヘム כבאנה בית לחם

18-19 節の集中化構造の真中に位置する b の 2 分節 (19a, 19ba) それぞれの後半においてベト・レヘムが並行的に 2 回繰り返されるのは, ベト・レヘムこそがまさに帰るべき家であり, そこにこそ食物^{レヘム}があるからと強調するために他ならない。

この集中化構造の真中にある b を枠組である a と結ぶつけるものはインクルジオとなっている動詞「行く」(הלך) である。

18a 彼女と共に行くこと (不定詞) ללכת אתה

19a 彼ら二人は行った (動詞は 3 人称女性複数形) וחלכנה שתיהם

ルツがナオミと共に行くことを決意しているのを見て, ナオミは説得するのをやめ (18 節), 結局二人はベト・レヘムに行くことになる (19 節前半)。

19a と 19ba それぞれの後半は並行的に記述されているが, 意味的には少しく異なるものである。前分節 (19a) では彼女たち二人がベト・

¹² 注 3 で述べたように F. Bush は 19b-21 節の文学構造を町の女たちとナオミの対話ととらえる。しかしながら 18-22 節の中心はやはりナオミの会話であり, 町の女たちの会話はそれを引き出す役割を果たすものでしかないと考えられる。

レヘムに着くまで歩いていった継続の行為が問題であるのに対し、後分節(19b)では彼女たちがベト・レヘムに着いたという到着の時点が問題となっている¹³。

同じ地名のベト・レヘムが並行的に使われており、空間的には同一の場所が問題となりつつも、前分節はベト・レヘムへ着く「まで」(עַד)の継続的な時間をあらわし、後分節はベト・レヘムへ着いたという瞬時的な時間(כִּי יָבִיאוּ)を言っている¹⁴。それゆえマソラ本文は19節をアトナー(א)の分割記号で二つのベト・レヘムを分けるわけである¹⁵。これはa(18節)の2分節で「彼女」(היא)という3人称単数女性代名詞が使われながらも、一方はナオミを意味し、他方はルツを意味するという違いがあるのに等しいであろう。

多くの註解者は19bから新しい段落がはじまるとして19aから分離する¹⁶。たしかに本稿も上述したように時間的、空間的な分離は認めるものではあるが、ベトレ・ヘムが並行的に記述されているということは¹⁷、分離とともに連繋もあるのであり、そうした観点から18-19節を見れば、キアスムスの集中化構造であるということもできる。

- (a) ナオミ→ルツを見る
- (b) ナオミは語るのをやめる
- (c) ベトレヘムへの帰途
- (c') ベトレヘムへの到着
- (b') 町の女たちは騒ぎ立つ
- (a') 女たち→ナオミと言う

¹³ R. L. Hubbard は同じ動詞 “בוא” (着く) を前分節では “reached” と訳し、後分節では “entered” と訳す。これは町の門の中に入るという理解である。前者は “wide shot”, 後者は “close-up” であるとする。前掲書, 121-122 頁参照。

¹⁴ “as soon as”, “at the very time” R. L. Hubbard, 前掲書, 121. 注3.

¹⁵ これは 1:12ba の ki と同様である。拙稿「ルツ記の研究 — 1章8～17節 —」40頁参照。

¹⁶ 注2参照。

¹⁷ LXX には 19b の「ベトレヘムに着いたとき」が欠落する。

2. ナオミの会話

(1) 1：20-21の本文

20aa	(2 語)		ותאמר אליהן
20aβ	(4 語)	אל־תקראנה לי נעמי	
20ba	(3 語)	קראן לי מרא	
20bβ	(5 語)	כי־המר שדי לי מאד	
21aa	(3 語)	אני מלאה הלכתי	
21aβ	(3 語)	וריקם השיבני יהיה	
21ba	(4 語)	למה תקראנה לי נעמי	
21bβ	(3 語)	ויהוה ענה בי	
21bγ	(3 語)	ושדי הרע לי	

(2) 1：20-21の翻訳

20aa	ナオミ ¹⁸ は彼女たちに言った。
20aβ	「私をナオミとは呼ばないでください。
20ba	私をマラと呼んでください。
20bβ	全能者が私をひどく苦しめられたのですから。
21aa	私は満ち足りた境遇で出かけたのに、
21aβ	何も無しで私を帰らせられたのですよ、主は。
21ba	なぜ私をナオミと呼ぶのですか。
21bβ	主は私を痛めつけ、
21bγ	全能者は私に悪い仕打ちをされたのです。」

(3) 1：20-21の構造

	20aa	会話の導入句			
a	(a-1)	20aβ	'al[否定詞]	呼ぶ	私を(+) + ナオミ
	(a-2)	20ba		呼ぶ	私を(+) + マラ
	(a-3)	20bβ	ki[小辞]	苦しめる 全能者	私を(+) + 大変に

¹⁸ 「ナオミ」は原文では「彼女」

b	(b-1)	21aa	(a)私は[主語]	(β)無尽蔵[形容詞]	(γ)行く[動詞]
	(b-2)	21aβ	(β')無一物[副詞]	(γ')帰す[動詞]	(a')主は[主語]
a'	(a'-1)	21ba	なぜ[疑問詞]	呼ぶ	私を(ㄅ) + ナオミ
	(a'-2)	21bβ	主	痛めつける	私を(ㄅ)
	(a'-3)	21bγ	全能者 シャツダイ	悪い仕打ちをする	私に(ㄅ)

集中化構造

20-21 節の全体は a-b-a' の集中化構造によって形成されており、それぞれ 3 分節 + 2 分節 + 3 分節から成り立っている¹⁹。

集中化構造の真中 (21 節前半) は、「私」で始まる分節と、「主」で終わる分節の 2 分節から成り、私と主が対立する並行法で記述されている²⁰。

1 人称代名詞の「私」(אני) は、枠組として a と a' にそれぞれ 3 回ずつある前置詞・1 人称接尾代名詞「私に」(ㄅ/ㄅ) の真中において強調されている。

他方、「主」は、それを b (20-21 節) の全体において見れば、全能者-主×主-全能者とキアスムスの形式で形成されていることがわかる。

① 枠組 a-a'

[a	呼ぶ (2 回), 同義的動詞 (1 回), 私を (ㄅ, 3 回), ナオミとマラ+全能者 (2 + 1 回)
	a'	呼ぶ (1 回), 同義的動詞 (2 回), 私を (ㄅ/ㄅ, 3 回), ナオミ+全能者と主 (1 + 2 回)

(i) 前置詞・1 人称代名詞 (3 回と 3 回)

集中化構造の枠組である前半 (20 節) では前置詞「～を/に」(ㄅ) に

¹⁹ フランススコ会聖書研究所の訳文は 21 節だけを前後から切り離して行をあげ強調しているが、文学構造の観点からは適切ではないと考えられる。『士師記・ルツ記』(中央出版社 1993) 162 頁参照。

²⁰ 21 節前半の F Bush の構造分析は正しいが、彼がこれを B として B' (21d = 本稿の 21bβ) に対応させているのは正しくなく、W (20b = 本稿の 20aβと 20ba) と W (21c = 本稿の 21ba) を wordplay で対応させるのも無理があると思われる。前掲書, 89-90 参照。上述のようにナオミの会話全体は集中化構造である理解される。

1人称代名詞がついた「私を」(אני/li)が3回あり、後半(21節後半)では「私を」(אני)が2回と、前置詞「～に/を」(ב)に1人称代名詞がついた「私を」(אני/bi)が1回の合計3回あらわれ、少しく均衡をくずしながらもシメトリーな対応関係にあると見てとれる。

前半	(a-1) 20aβ 私を (אני)	後半	(a'-1) 21ba 私を (אני)
	(a-2) 20ba 私を (אני)		(a'-2) 21bβ 私を (בני)
	(a-3) 20bβ 私を (אני)		(a'-3) 21bγ 私を (אני)

ルツ記1章全体の中で「私を」(אני)と「私を」(בני)がどのように配置されているかを見てみると、そのどちらもがナオミの嫁たちに対する言葉(11-13)と、ルツのナオミに対する言葉(16-17節)の中で使われているということがわかる。

(→) 11-13節(ナオミの嫁たちに対する言葉)との比較

すでに見たように、ナオミの嫁たちに対する会話の部分(11-13)は「私の娘たちよ」という呼びかけの言葉で3区分(A-1, A-2, A-3)されており、אניはそれぞれの中で均等に配置されている。

- 11b 私には、私のお腹にはまだ子供達がいると～， העורלי בנים במעי
- 12b 私にはまだ望みがあると、 כי אמרתי ישלי תקוה
- 13b 私にはあなた方が大変に苦しいのです。 כי-מרלי מאד מכם

最後の13bは当該個所の20bと対応する。13bでナオミは嫁たちにあなたがたが私を大変に苦しめると言うが、20bでナオミは女たちに対して全能者が私を大変に苦しめると言う。ナオミにとって相手が嫁たちと全能者という違いはあるが、どちらもナオミを「大変に」(מאד)苦しめると言うのである。どちらの箇所においても文節は「実際」(כי)で始まり、それに「苦しい」(מר) / 「苦しめる」(מרר)が続いている。

- 13b 私にはあなた方が大変に苦しいのです。 כי-מרלי מאד מכם
- 20b 全能者は私を大変に苦しめられたのです。 כי-המר שדי לי מאד

さらに、13bでは「私に大変に」(לי מאד) + 「あなたがたから」という構文、20bでは「全能者」 + 「私を大変に」(לי מאד) という構文になっていて、13bと20bの両者を合わせてみるとキアスムスの構成となっているということがわかる。

〔 13b ナオミ→嫁たち：ki + 苦しい + (a)私に + 大変に + (b)あなた方から

〔 20b ナオミ→女たち：ki + 苦しめる + (b')全能者は + (a')私を + 大変に

他方「私を」(בי)はナオミの嫁たちに対する会話の最後(13bβ)にあって、主の手が私に出ているとして、21節と同様に主がナオミを苦しめることを意味している。これもまた両者を合わせみるとキアスムスの構成となっていることがわかる。

〔 13b (b) 主の手が (a) 私に(בי)出ている。 ויהוה יד-יהוה (b) בי יצאה (a)

〔 21b (b') 主は (a') 私を(בי)痛めつけ, בי ענה (a') ויהוה (b')

(二) 16-17 節 (ルツのナオミに対する言葉) との比較

ルツのナオミに対する言葉(16-17節)の中でも「私に」(לי)と「私に」(בי)が1回ずつ用いられている。

〔 16aa そんなひどいことを私に(בי)強くないで下さい。 אל-תחפני-בי

〔 17ba 主がいくらでも私に(לי)そうされますように。 כה יעשה יהוה לי

「私に」(בי)はルツの会話(16-17節)の始め(16a)にあって相手はナオミという人であるのに対し、「私に」(לי)は会話の終わりの部分(17b)にあって相手は主という神である。

他方、ナオミの会話(20-21節)の中では אני が4回先にあって相手は町の女たちという人であるのに対し²¹、後に1回ずつある בי + אני の相手は主、全能者という神である²²。

〔 21bβ 主は私を(בי)痛めつけ, ויהוה ענה בי

〔 21bγ 全能者は私に(לי)悪い仕打ちをされたのです。 ושדני הרע לי

(三) ナオミの会話(11-13節)とルツの会話(16-17節)との比較

ナオミの会話(11-13節)の中での אני + בי の順序と、ルツの会話(16-17節)の中での בי + אני の順序は入れ替わっていることになり、両者を合わせてみればキアスムスの様式で構成されているということが明らかとなる。但し、どちらも先に人の側からの苦しみを述べ、後に神の側からの痛みを記すというふうに並行的となっている。

²¹ 前半の3回と、後半のはじめの1回を合わせてのことである。

²² 両分節は同義的並行法で記されている。

ナオミの言葉 (13 節) とルツの言葉 (16-17 節)

- 13ba (A) 人→וְאֵל (a) : 私には(וְאֵל)あなたがたのことが大変に苦しい。
- 13bβ (B) 主→בְּיָד (b) : 主の手が私に(בְּיָד)出ていることなのですから。
- 16aa (A') 人→בְּיָד (b') : そんなひどいことを私に(בְּיָד)強いないでください。
- 17ba (B') 主→וְאֵל (a') : 主がいくらでも私に(וְאֵל)そうされますように。

(ii) 動詞「呼ぶ」(קרא)

⊖ナオミ-マラ-ナオミ

動詞「呼ぶ」は前半の a (20 節) で 2 回, 後半の a' (21 節) で 1 回使われている。これらの用法をナオミの会話全体の中で見れば, 20b の「私をマラと呼んでください」をはさんで「私をナオミと叫ばないでください」(20a) と「私をなぜナオミと呼ぶのですか」(21b) が枠組を形成し, ナオミ-マラ-ナオミという構造になっているということがわかる。

- a-1 ナオミと私を叫ばないでください。 אל־תקראנה לי נעמי
- a-2 マラと私を呼んでください。 קראן לי מרא
- a'-1 なぜナオミと私を呼ぶのですか。 למה תקראנה לי נעמי

枠組を構成する a-1 と a'-1 は, ただ最初の一語が違うだけであり, 前者が否定詞 (אל/'al), 後者が疑問詞 (למה/lamá) で始まる文節である。ただ後者の疑問詞は反語的な用法であり, 両者は同じ意味合いを持つ文節として対応関係にあると言える。

⊖否定詞 (אל) と疑問詞 (למה)

この否定詞 (אל) と疑問詞 (למה) は, 順序は逆ではあるが, ナオミが嫁たちに語りかける会話の中 (11, 12 節) においても一対となって用いられている。1 章の中心 (B) にある 8 ~ 17 節にはナオミの会話が 3 回あるが, その真中にある第 2 回目の会話 (11-13 節) の枠組それぞれの最初に疑問詞 (למה) と否定詞 (la) が措定されている²³。

- 11a (a) 私の娘たちよ, (b) なぜ, בנותי (b) למה
- 13b (b') いけません。 (a') 私の娘たちよ, אל (a') בנותי

11-13 節のナオミの嫁たちに対する会話と, 20-21 節のナオミの女たちに対する会話における否定詞 (אל) と疑問詞 (למה) の両者を合わせ

²³ 拙稿「ルツ記の研究 — 1 章 8 ~ 17 節 —」34-35 頁参照。

てみると、全体としてキアスムスの様式で構成されているということが明らかとなる。前者はナオミが嫁たちに、後者はナオミが町の女たちに語りかける言葉においてであり、両者ともにナオミが複数の女性を相手にしての会話においてのことである。

ナオミ→嫁たち

(a) 11a なぜ、私と一緒に来ようとするのですか。 למה תלכנה עמי

(b) 13b いけません、私の娘たちよ。 אל בנתי

ナオミ→女たち

(b') 20aβ いけません、私をナオミと呼ぶのは。 אל־תקראנה לי נעמי

(a') 21ba なぜ、私をナオミと呼ぶのですか。 למה תקראנה לי נעמי

㊦対立：ナオミとマラ

- 〔 20aβ 私をナオミと呼ばないでください
- 〔 20ba 私をマラと呼んでください

20aβと20abで動詞「呼ぶ」は並行的に書かれている。しかしながら前者がナオミと呼ぶことの否定、後者がマラと呼ぶことの肯定であって、呼ぶことの否定と肯定、ナオミとマラの対立がある。

㊦4章の「呼ぶ」(קרא)との比較

1章20-21節の「呼ぶ」(קרא)と4章11-17節の「呼ぶ/名付ける」(קרא-カハラ)はルツ記全体の始めと終わりにあって対応関係にある²⁴。

- 〔 1: 20a ナオミ→女たち 私をナオミと呼ばないでください。 תקראנה
- 〔 1: 20b ナオミ→女たち 私をマラと呼んでください。 קראן
- 〔 1: 21b ナオミ→女たち 私をなぜナオミと呼ぶのですか。 תקראנה
- 4: 11 民、長老→ボアズ ベト・レームで名を呼ぶ。 וקרא־שם
- 〔 4: 14 女たち→ナオミ 彼の名はイスラエルで呼ばれる。 ויקרא שמו
- 〔 4: 17a 女たち²⁵ 彼の名を名付ける。 ושם ~ ותקראנה
- 〔 4: 17b 女たち 彼の名をオベドと名付ける。 ותקראנה שמו

²⁴ S. Bertman, "Synmetrical Design in the Book of Ruth" *JBL* 84 (1965) 165-168. 但し、彼は (1) 1: 8-18 と (1) 4: 1-12, (2) 1: 19-21 と (2) 4: 14-17 を対とする。

²⁵ 原文では「住民(近所)」の女性複数形。

1：20-21 ではナオミと呼ばないでください、マラと呼んでください、なぜナオミと呼ぶのですかと立て続けに動詞「呼ぶ」はナオミという名前に対して否定的な用法で使われている。

それに対して4：11-17で動詞「呼ぶ」はすべて肯定的な意味で使われている。4：11では門にいたすべての民と町の長老たち（男性）が、ボアズ（男性）に対してエフラタで富を成し、ベト・レームで名を成せ（呼べ）と言う。地名のエフラタとベト・レームが並行的であり、動詞の命令形の「成す」と「呼ぶ」が並行的である。エフラタとベト・レームは1：2との対応関係が認められ、そこでは二人の息子、マフロンとキルヨンが問題となっているのに対し、4章では息子の誕生が暗示されている。

4：14では今度は女たちがナオミに向かって、イスラエルでルツによって産まれた息子の名が呼ばれるように（名声を博するように、ニファル形）と言う。1：19で女たちはナオミに向かって「これはナオミではないの」とナオミ（女）の名前を口にして言う（וּתְאִמְרָנָה）が、4：14では女たちはナオミに向かって「彼の名²⁶がイスラエルで呼ばれるように（その子がイスラエルで名を成すように）」と彼（男）の名前を口にして言う（וּתְאִמְרָנָה）。4：17では住民の女たちがナオミに子供が生まれたと言って彼に名をつけ（וּתְקַרְאָנָה）、その子をオベドと名付けた（וּתְקַרְאָנָה）と書かれている。これは1：12でナオミが否定的に男の子を生む可能性について語っているのに対応する²⁷。

1：20-21ではナオミが女たちに語りかける会話の中で「呼ぶ」は使われており、4：11では門にいるすべて民と町の長老たちがボアズに述べる会話の中で「呼ぶ」が用いられている。そして4：14では女たちが、4：17では住民の女性たちがナオミに対して言う言葉の中で「呼ぶ」が使用されている。

すなわちルツ記全体に合計7回ある動詞「呼ぶ」は、4：11の男性が男性に語りかける言葉を真中にして、その前後3回それぞれは女性が女

²⁶ 但し、LXXでは「あなたの名が」となっている。

²⁷ 名詞「男の子」（בֶּן־אִישׁ）は1：5では死んだ男の子、4：16では生まれた男の子と対照的である。

性に語りかける言葉の中にあられるということである。前の3回はナオミが女たちに言う言葉の中で女性の名前(ナオミ)が否定的に、後の3回は女たちがナオミに言う言葉の中で男性の名前(オベド)が肯定的にである。

(iii) 人名と神名

ナオミ(人名)と全能者(神名)が会話の前半と後半のそれぞれのはじめとおわりにあって枠組を形成している。前半は人名(ナオミとマラ)が2回, 神名(全能者)が1回, 後半は人名(ナオミ)が1回, 神名(主と全能者)が2回であり, 人名に関しては動詞「呼ぶ」が3回使われ, 神名に関しては同義的動詞, 「苦しめる」, 「痛めつける」, 「悪い仕打ちをする」が3回用いられている。これは前半=2回+1回, 後半=1回+2回という構成で, 創世記1章の6日間の構成における無生物と生物の創造の記事に対応すると見てよいだろう²⁸。

* ナオミの言葉の分割(ルツ記)

- (a-1) 20aβ ナオミ(呼ぶ) (a'-1) 21ba ナオミ(呼ぶ)
 (a-2) 20ba マラ(呼ぶ) (a'-2) 21bβ 主(痛めつける)
 (a-3) 20bβ 全能者(苦しめる) (a'-3) 21by 全能者(悪い仕打ちをする)

* 神の言葉の分割(創世記)²⁹

- | | |
|---------------|---------------|
| 第1日目 無生物(分ける) | 第4日目 無生物(分ける) |
| 第2日目 無生物(分ける) | 第5日目 生物(それぞれ) |
| 第3日目 生物(それぞれ) | 第6日目 生物(それぞれ) |

(一) 人名: ナオミとマラ

§ 1 並行: ナオミとナオミ

すでに見たように, a-1とa'-1の文節は否定詞と疑問詞が異なるだけでナオミの名前が並行して出て来る。

²⁸ 6日間の構成に関しては, 他にも神の言葉の対応(5回と5回)と語数の対応によって, 1, 2, 3, 4日と5, 6日の4日(207語)と2日(206語)に分ける見方(P. Beauchamp)や, 記事内容の対応から1, 2, 3, 日と4, 5, 6日の3日と3日に分ける見方などがある。

²⁹ 「分ける」は全部で5回, 「それぞれ」は全部で10回である。

§ 2 対立：ナオミとマラ

a-1のナオミとa-2のマラは意味的に「甘美な」と「苦い」と対立する人名として述べられている³⁰。ナオミの意味の説明はここではないが、マラの意味の説明は次の分節 a-3 にあり「苦い」と理解される。ナオミと呼ばないでください、マラと呼んでくださいと否定文と肯定文としても対立している³¹。

§ 3 交差：ナオミ-マラ×マラル-ナオミ

人名を続けて見れば、ナオミ、マラ、ナオミとなるが、a-3の説明の動詞「苦しめる」(מָרַר)を含めれば³²、ナオミ-マラ×マラル(動詞)-ナオミとなり、キアスムスの様式で構成されているということになる。4分節のこれらの単語の前にはすべて「私を」(אֲנִי)の一語があり、a'-2とa'-3の2分節がאֲנִיあるいはאֲנִיの後に何の単語も記されていないことから、この4分節は一種の様式美をもって書かれていると考えられる。

(a-1) a	ナオミ	否定	אֶל-תִּקְרְאֶנָּה לִי נְעָמִי
(a-2) b	マラ	肯定	קְרֹאן לִי מְרָא
(a-3) b'	マラル	理由	כִּי-הִמַּר שְׂדֵי לִי מְאֹד
(a'-1) a'	ナオミ	反語	לְמָה תִּקְרְאֶנָּה לִי נְעָמִי
(a'-2)			וַיְהִי עִנָּה בִּי
(a'-3)			וְשְׂדֵי הָרַע לִי

(二)神名：主と全能者

同一人物の人名に関してナオミとマラの二語が使われていたように、同一神格についても主と全能者の二語が用いられている³³。但し、ナオ

³⁰ E. F. Campbell は“Sweet one”, “Bitter one”と訳す。Ruth, 76 頁参照。但し、マラは架空の人名ではある。

³¹ I. Fischer は 19b のナオミと 20b のマラの名前は肯定的な、20a と 21b のナオミの名前は否定的な言述として見る。その理由づけは 20b の全能者と 21b の主、全能者の分節にあるとするが、文学構造の観点から適切であるとは思われない。Rut (Herder 2001) 150.

³² 明白には記されていないが、創 4:2 のカインの名前の説明が「得る」(קָנָה)であると考えられるのに相当する。

³³ 神の単語はここでは出てこない。

ミとマラの場合には対立的、主と全能者の場合には並行的である。

また人名が前半のはじめ (a-1, a-2) の 2 分節の最後にあったのとは反対に、神名は後半のおわり (a'-2, a'-3) の 2 分節の最初に措定されている。

(a-1) ……ナオミ

(a-2) ……マラ (a'-2) 主 ……

(a'-3) 全能者……

§ 1 並行：全能者と全能者

a-3 と a'-3 の全能者はすでに見たように並行的に書かれている。ただ両分節を合わせてみると、動詞-主語×主語-動詞という順序でキアスムスの様式となっているということがわかる。また動詞は異なるが同義的な動詞であり³⁴、どちらも同じ使役形である³⁵。

〔 a-3 苦しめる (מרר, hif.) + 全能者 (שרי) + 私を (י)]

〔 a'-3 全能者 (שרי) + 悪い仕打ちをする (רעע, hif.) + 私に (י)]

§ 2 交差：全能者と主

人名のナオミとマラが前半と後半の枠組でキアスムスの様式によって構成されていると見たが、神名の場合には集中化構造の真中の b (21a) を合わせて入れて見ると、全能者-主×主-全能者というキアスムスの様式で形成されているということがわかる³⁶。前半の a と b は動詞-主語の順序であるが、後半の b' と a' は主語-動詞という順序になっている。

〔 (a) 20bβ 動詞+全能者 (b) 21bβ 主+動詞]

〔 (b') 21aβ 動詞+主 (a') 21bγ 全能者+動詞]

動詞はすべてナオミに対して否定的なものである。21a の場合には主がナオミを「何も無しで帰す (שוב)」と言われているが、その他の三か

³⁴ a'-3 の「悪い仕打ちをする」(רעע, hif.) を「苦しめる」と訳すことも可能である (創 43 : 6, ミカ 4 : 6 等参照)。רעע の使役形が主を主語として前置詞「～に/を」(ב) をともなうのは、出 5 : 22, 民 11 : 11, ヨシ 24 : 20, エレ 25 : 6, ザカ 8 : 14. 前置詞なしには王上 17 : 20, ミカ 4 : 6, ゼファ 1 : 12, 詩 44 : 3. DCH, VII : 530 参照。

³⁵ מרר と רעע は両者ともに二重アイン (עע) の動詞である。

³⁶ R. L. Hubbard, 前掲書, 126 頁, 注 30 参照。

所はすべて「苦しめる」(מָרַר)³⁷、「痛めつける」(עָנָה)³⁸、「悪い仕打ちをする」(רָעַע) という同義的動詞が使われている。

②真中 b

ナオミの会話の真中 (21 節前半) には私と主の対立がある。21 節前半は「私」(אָנִי) の単語で始まり、「主」(יְהוָה) の単語で終る。この二語が対立的に枠組を形成している。飢饉という食物のない辛い状況でありながらも、「私」は家族がそろった満ち足りた境遇で出かけたのに、今度は食物があるという幸いな状況でありながら、「主」は家族が欠けた空しい状態で私を帰らせたというのである。全体は少しく変形はしているがキアスムスの様式で形成されている。

(a) 私は + (b) 満ち足りて + 行く

(b') 何も無しで + 帰す (a') 主は

(i) 対立：私と主

(一)私

すでに考察したように、21 節にある「私」(אָנִי = 1 人称代名詞) は、枠組である前半 (20 節) と後半 (21 節) に 3 回ずつ出てくる「私を」(בִּי/לִי = 前置詞 + 1 人称代名詞語尾) の真中であって前半と後半を媒介するものである。前半は私に重点があり — ナオミが 2 回 —、後半は主に重点がある — 主と全能者で 2 回 —。それゆえ、21 節前半の最初に「私」(אָנִי) があって前半を受け継ぎ、最後に「主」があって後半へと繋いでゆくのである。

³⁷ ヨブ 27 : 2 には「全能者が私 (נַפְשִׁי) を苦しめられた (מָרַר)」とある。

³⁸ 本稿では LXX, Vulg., Syr. などに従って עָנָה II のピエル形「痛めつける、悩ます」と解釈する。ただ עָנָה II は前置詞「～に」(ב/ב') を取らないので問題は残る。P. Jotjon, *Ruth*, 45. *BHQ* (Stuttgart 2004) 52* 参照。申 26 : 6 では רָעַע の使役形と עָנָה II のピエル形が並行的に使われている。「エジプト人は私たちを苦しめ、虐げ、～」。MT は עָנָה I 「答える」の qal, 3 人称単数形。F. Bush, 前掲書, 93. R. L. Hubbard, 前掲書, 126-127, フランシスコ会聖書研究所, 前掲書, 162-163 頁参照。BDB, 773 (但し, עָנָה *humiliate*), DHC, VI:496 (但し, unless עָנָה II afflict)", HALAT, II:806 (但し, Gerleman ~ nach G S V ab)。

(二)主

「主」は1章で合計7回使われている³⁹。まず6節の叙述文においては「主がその民を顧みられた」と主の好意が述べられている。これは食物に関係することであるが、それが機縁となってナオミたちはベト・レヘムに帰る決意を固めるのである。次にナオミは最初の会話において「主があなただがたに恵みを施し、～主があなただがたとに与えられるように～」(8節)と二人の嫁たちに言うが、次の会話においては子供ができないことの不満を「主の手が私に出たのです」(13節)と述べる。ルツはナオミに対してあくまでも彼女についてゆくことを述べ、もしそうでないならば「主がいくらでも私を罰せられますように」(17節)と言う。最後の会話においてナオミは町の女たちにあからさまに「主は私を何もなしで帰らせられた」(21節前半)と言い、「主は私に悪い仕打ちをされた」(21節後半)と述べる。

1章において主は善意の主で始まりつつも、徐々に主はナオミには耐え難い存在として立ちほだかり、彼女は主に対する不満を吐露するのである。

(ii) 対立：「満ち足りて」と「何も無しで」

「満ち足りて」(מלאה) 私(ナオミ)が出かけたと述べる前分節と、「何も無しで」(ריק) 主が私(ナオミ)を帰らせたという後文節は対立する。問題はこの「満ち足りて」と「何も無しで」の意味である。

上述の(二)「主」の項で考察したように、ナオミが主に対して不満を持つのは自分に子供がいけないことによる。食物に関しては保障されたのでベト・レヘムに帰って行く。しかし子供はいない。息子二人はなくなり、自分にはもう子供の出来る可能性はない。

飢饉のゆえにナオミは夫と二人の息子とモアブの平野に出かけて行ったが⁴⁰、主がその民を顧みられ食物を与えられたと聞いて、ナオミはベト・レヘムに帰って来る。ただ一緒に帰って来たのは嫁のルツだけであ

³⁹ 1 : 6, 8, 8, 13, 17, 21a, 21b.

⁴⁰ “un mari et des fils” P. Jotou, 前掲書, 44-45頁。“Her life lacked nothing” R. L. Hubbard, 前掲書, 125頁。

る。モアブの平野で夫と息子の二人の男性3人を失ったからであり⁴¹、嫁のオルパも別れたからである。それゆえナオミは主は私をむなしく何も無しで帰らせられたと言うのである⁴²。

「満ち足りて」と「何も無しで」は土地や財産のあるなしではなく、また食物や衣服のあるなしでもなく、家族——特に息子——のことでありと解される。これがナオミの町の女たちに対する発言の中心である⁴³。

(iii) 対立：「行く」と「帰る」

前分節 (21aα) には「行く」(הלך) が⁴⁴、後分節 (21aβ) には「帰る」(שוב, 使役形) があって「行く」と「帰る」が対立する動詞として出てくる。

18-22 節全体では、a (18-19 節) で「行く」が2回、a' (22 節) で「帰る」が2回使われている。真中の b (20-21 節) では a (18-19 節) の「行く」を受け継ぐかたちで「行く」があり、a' (22 節) の「帰る」に引き渡すかたちで「帰る」が置かれている⁴⁵。

行く (18 節) + 行く (19 節) + 行く (21 節)

帰る (21 節) + 帰る (22 節) + 帰る (22 節)

⁴¹ “neither husband nor children” R. L. Hubbard, 前掲書, 126 頁。

⁴² 「何も無しで」(ריקים) と「帰る」(שוב) が一緒に出て来るのはサム下 1 : 22, イザ 55 : 11, エレ 14 : 3, 50 : 9 である。「帰る」(שוב) の使役形はルツ記では他に 4 : 15 にあり、そこでは魂 (ネフェシュ) を生き返らせるという意味で使われており、22 節で言われている何も無しで帰らせるを覆している。

⁴³ 但し、3 : 17 でルツがナオミに言う「何も無しで」は大麥のことである。

⁴⁴ R. L. Hubbard は “I left” と訳し、1 : 1 との関係を見る。前掲書, 122 頁。1 節の「行く」はエリメレクが飢饉のために出かけたことを言い、21 節の「行く」はナオミが「満ち足りて」て出かけたことを述べ、背後に否定的な意味 (飢饉) と肯定的な意味 (家族) を持っており、同じ動詞が使われながらも対照的な用法である。

⁴⁵ これは先に見た「私」(אני) が B の前半の「私を」(אי) と後半の「私を」(אי, כי) の真中にあるのに構造的に同じである。

3. ナオミとルツの帰還

(1) 1:22 の本文

22aa	(6 語)	וְחָשַׁב נְעֻמִי וְרוּחַ הַמּוֹאֲבִיָּה כָּל־חַתַּת עֵמָּה
22aβ	(3 語)	הַשְּׁבָה מִשְׁדֵּי מוֹאֵב
22ba	(4 語)	וְהָמָה בָּאוּ בֵּית לַחֵם
22bβ	(3 語)	בַּחֲחֻלַּת קִצִּיר שְׁעָרַיִם

(2) 1:22 の翻訳

22aa	ナオミは… [挿入句] …モアブの女性ルツと一緒に帰った。
22aβ	…モアブの平野から [自分たちのところへ] 戻って来た…
22ba	彼女たちはベト・レヘムに着いた。
22bβ	それは大麦の刈り入れのはじめの頃であった

(3) 1:22 の構造

人物：帰る (3sg.f.) + ナオミ + ルツ	+ モアブの女性 + 嫁～
場所：帰る (3sg.f.) ・冠詞	+ モアブの平野 ・ から
場所：彼ら (3pl.m.pron.) ⁴⁶ + 着く (3pl.m.) + ベト・レヘム	
時間：[名詞文]	初めに + 刈り入れ + 大麦

ルツ記 1 章の最後である 22 節は一節でありながら、物語のまとめとして 1 章のすべてを総括している。これは 1 章の最初である 1-2 節が人物、場所、事件の 4W を含んでいるのとは対応関係にあり、1 章全体の枠組を構成している⁴⁷。以下においてルツ記のはじめとおわりの対応関係を、時間、事件、場所、人物に関して考察する。

⁴⁶ 8 節の代名詞の場合と同様、女性形ではなく男性形代名詞が使われている。

⁴⁷ 1 章のはじめ (1 節) とおわり (22 節) は文体的に対応している。1 節では動詞「ある」(הָיָה) が 2 回繰り返され、22 節では動詞「帰る」が 2 回繰り返されている。

	A (1 節)	A' (22 節)
人物	男性 + ナオミ	ナオミ + 女性
場所	ベト・レヘム → モアブの平野	モアブの平野 → ベト・レヘム
時間	士師たちが治めていた時代	大麦の収穫の初めの頃
事件	飢饉	収穫

①時間

〔A 1 節：士師たちが治めていた時代に， ויהי בימי שפט השפטים
 A' 22 節：大麦の刈り入れのはじめに， בתחלת קציר שעירים〕
 1 節の最初の分節 (1aa) と、22 節の最後の分節 (22bβ) はどちらも時間を表示するという意味で対応している⁴⁸。両者において前置詞「～において」(ב) が時間のために用いられており、前者では「～時代に/～日々に」(בימי)，後者では「はじめに」(בתחלת) と記されている。

1 節では士師たちが治めていた時代という設定があるのに対し、22 節では大麦の刈り入れの初めの頃という季節の設定がある⁴⁹。1 節の単語自体は「日々に」(בַּיּוֹם の複数) という基本的には日を意味する単語が使われているが、ここでは数年という長い単位の時間が考えられる⁵⁰。

それに対して、22 節は大麦が収穫される一年の中のある季節という短い単位の時間である⁵¹。ただ 1 章の終りににおいて「はじめに」と述べられているのは、これから展開される物語のはじめを意味するからでもあると考えられる⁵²。

ルツ記 1 章は、士師たちが世を治めていた時代という長い時間の設定ではじまり、大麦の刈り入れのはじめというより短い時間の設定でおわる。

他方、ルツ記全体は、士師たちが世を治めていた時代という長い時間

⁴⁸ 主語はどちらも複数形である。

⁴⁹ これは出来事の時期を正確に述べるためであると P. Jotjon は言う。

⁵⁰ 士師記によれば、士師が裁いた年数の最小期間はエフタの 6 年 (士 12:7) であり、最長期間はエフドの 80 年 (士 3:30) である。

⁵¹ 通常は 4、5 月頃である。ルツ 2:23, サム下 21:9-10, ユデイト 8:2, 参照。

⁵² 2 章から 3 章にかけては大麦の収穫の場面が設定されている。2:17, 23.3:2, 15, 17.

のスパンで開かれ、10年の歳月を経て(1:4)、ペレツからダビデへまでの10代の世代(4:18-22)という長い時間のスパンで閉じられる。

②出来事

- 〔 B' 1aβ : 飢饉の発生 ויהי רעב בארץ
 B' 22bβ : 大麦の収穫 בתחלת קציר שערים

最初の1節が「その地に飢饉があった」との危機的な出来事の記述ではじまるのに対し、最後の22節は「大麦の収穫の初めに」との朗報的な出来事でおわる。大地の「飢饉」に対して大麦の収穫という「食物」が対立する。

1節は飢饉がその地であったと飢饉の場所を特定しているのに対し、22節は大麦の刈り入れの初めの頃と収穫の時間を設定している。1節の「その地」はその次の分節でベト・レヘムであるということが明らかになるのであるが、22節では大麦の刈り入れの場所はその前の分節で言われているベト・レヘムに他ならない。1節では飢饉がおこったのが皮肉なことにベト・レヘム(家・食物)であるというのに対し、22節ではベト・レヘムに着いたのが大麦の収穫の頃とレヘム(食物)を具体的に「大麦」と書き表している。1章全体で見れば、ベト・レヘムではじまる物語は6節の「食物」(レヘム)で大きな転換点をむかえ、ベト・レヘムへでおわるのである。

③場所

1節では、ある男がモアブの平野に一時滞在するためにベト・レヘムから出かけて行くのであるが、22節ではモアブの平野から自分たちのところに戻って来たモアブの女性ルツと一緒にナオミがベト・レヘムに帰着する。1節と22節を照らし合わせれば、ベト・レヘム-モアブの平野×モアブの平野-ベト・レヘムとキアスムスの様式で形成されていることになる。

(a) 1ba	: ベト・レヘムから	<u>וילך איש מבית לחם</u>
(b) 1ba	: モアブの平野へ	<u>לגור בשדרי מואב</u>
(b') 22aβ	: モアブの平野から	<u>השבה משדרי מואב</u>
(a') 22ba	: ベト・レヘムへ	<u>והמה באו בית לחם</u>

22 節でルツがモアブ人の女性 (המואביה) で、彼女はモアブの平野 (שְׂדֵי מוֹאָב) から自分たちのところに戻って来た者 (שׁוֹב) のだと説明されている⁵³。ベト・レヘムに帰って来るのはナオミとルツの二人の女性であるが⁵⁴、ここではモアブを2回繰り返すことによって、ルツとモアブの関係が特に強調されている⁵⁵。

2 節ではナオミの二人の息子マフローンとキルヨーンがユダのベト・レヘムからのエフラタ人 (אפרתיים) と言われるのに対し、4 節では彼らに二人のモアブ人の女性 (מואביות) を娶ったと述べられ、エフラタ人男性 (複数) とモアブ人女性 (複数) が対比されている。そして最後の22 節ではナオミとルツの二人の女性のうち、ルツがモアブ人女性 (単数) であるということが強調されて終わっている⁵⁶。

2 節：マフローンとキルヨーン (二人の男性)	מחליין וכליין
ベト・レヘムからのエフラタ人男性(複数)	אפרתיים מביית לחם
22 節：ナオミとルツ (二人の女性)	נעמי ורות
モアブの平野からのモアブ人女性(単数)	המואביה ~ משְׂדֵי מוֹאָב

⁵³ הַשְּׁבָה は MT のアクセントから関係代名詞の役割を果たす冠詞をともなった完了と理解される。2:6, 4:3 参照。הַשְּׁבָה の主語がナオミなのかルツなのかという問題があるが、最近の多くの註解書が述べるように、本稿でもルツが妥当であると解釈する。E. F. Campbell, *Ruth*, 80. E. Zenger, *Das Buch Ruth*, 44. R. L. Hubbard, 前掲書 128-129. E. Bush, 前掲書, 94. I. Fischer, 前掲書, 150,154.

⁵⁴ はじめの「彼女は帰った」וַתָּשָׁב は 3 人称女性単数で主語はナオミであるが、これにはルツも含まれる。6 節の「彼女は帰った」וַתָּשָׁב と同じであり、インクルジオとなっている。1 章で 12 回 (1:6, 7, 8, 10, 11, 12, 15, 16, 21 (hif), 22, 22.) 使われている「帰る」(שׁוֹב) の最初は (6 節) ナオミ、最後 (22 節) はルツが主語となっており、どちらもモアブの平野からの帰還と述べられている。E. F. Campbell, 前掲書, 80 頁参照。

⁵⁵ 「帰る」も 2 回繰り返されているが、はじめはナオミ、あとがルツと主語は異なる。

⁵⁶ モアブ人女性には冠詞がついていて、ルツが「そのモアブ人女性」と特定されている。2:2, 6, 21.4:5, 10 参照。E. Bush はこれをルツのフルネームで、外国人起源の強調であると述べる。前掲書, 94 頁参照。

④人物

1節は「ある男」という不特定の人物ではじまり、つづいても「彼」、「彼の妻」、「彼の二人の息子たち」とだけ書かれており、具体的な名前は述べられていない。具体的な名前は2節に入ってからで、「名前」(שם)という単語を3回並列して、「その男の名はエリメレク」、「彼の妻の名はナオミ」、「彼の二人の息子の名はマフローンとキルヨーン」と述べられている。

ここではまだモアブの女性オルパとルツは登場しない。彼女らの名が出てくるのはエリメレクの死後、二人の息子に嫁を取ることになる4節においてである。彼女らはモアブ人女性(複数)で「名前」(שם)という単語を2回並列して述べられている⁵⁷。

ベトレヘムに帰着するのはナオミとルツ、姑と嫁の女性二人だけである。夫が亡くなり、二人の息子も亡くなり、男性3人はすべて消えている。他方女性3人は残っている。ただ、二人の息子の嫁であるモアブ人女性のオルパは自分の民、自分の神のところに戻り(שוב), モアブの平野からナオミのところへ戻った(שוב)ルツのみがナオミとともにベトレヘムに帰るのである。15節でナオミはルツに義理の姉妹(オルパ)のあとを追って帰りなさい(שוב)と言うのであるが、22節でルツはナオミのところに戻って(שוב)一緒にベトレヘムに帰る。

おわりに

本稿ではルツ記1章の最後の部分である(A')18-22節が、(a)18-19節、(b)20-21節、(a')22節の三区分から成り立ち、(b)のナオミの会話を真中にして、前後に対応する叙述文が置かれた集中化構造であると分析した。

ルツ記1章は、(A)1-7節、(B)8-17節、(A')18-22節の三部構成で、真中の(B)にはナオミと嫁たちとの会話があり、これをはさんで(A)と(A')が対応している。

⁵⁷ マフローンとキルヨーンの場合には「名前」(שם)は兄弟二人に対し1回だけである。

(A) はエリメレク一家のベト・レヘムからモアブの平野への出発と、ナオミと嫁たちのベト・レヘムへの帰還の途中で話は途切れ、(B) はその道中でのナオミと嫁たちとの会話である。(A') は再度、帰途の続行から話がはじまり、やがてナオミとルツがベト・レヘムへと到着する記事で終わる。

(A) と (A') を繋げるのは、インクルジオとなっている動詞「行く」(7 節と 18-19 節) であり、地名「モアブの平野」(6 節) と「ベト・レヘムへ」(19 節) である。

(A) 1-7 節は、(a) 1-2 節、(b) 3-5 節、(c) 6-7 節の三分区から成り立つのであるが、6-7 節に相応するのが 18-19 節であることから、18-19 節はキアスムスの観点から (A') の (c') として理解される。

(A) の真中にある (b) 3-5 節と (A') の真中にある (b) 20-21 節は、両者ともに集中化構造となっていることから対応関係が認められると考えられる。(A) の (b) の真中には「一人の名はオルパ、もう一人の名はルツ」(4 節) とあり、(A') の (b) の真中には「私と主」(21 節) があり、どちらも結合と分離の意味を持っている⁵⁸。それゆえ 20-21 節は、3-5 節との相応から、(A') の (b') として把握される。

(A) のはじめの (a) 1 節と、(A') のおわりの (a) 22 節の対応関係は本稿で見たとおりであり、22 節は 1-7 節との相応から、(A') の (a') と理解される。

すなわち、ルツ記 1 章は (B) 8-17 節を真中にして、(A) 1-7 節と (A') 18-22 節がこれを囲い込み、(A) の (a) 1-2 節、(b) 3-5 節、(c) 6-7 節は、(A') 18-22 節の、(c') 18-19 節、(b') 20-21 節、(a') 22 節に対応すると見てよいであろう。

⁵⁸ オルパとルツはモアブ女性で義理の姉妹であるが、オルパは去って行く。私 (ナオミ) と主は信頼関係がありつつも、ナオミは神の仕打ちを嘆く。